

1. 事業の目的・経緯

里山フィールドでは、2006 年より続けている里山保全活動を継続して行うことと、里山散策学習会「はりま里山の自遊人」、県青少年本部のプレーパーク事業「里山ガーデン冒険ひろば」の開催、その他地域交流事業を行うことにより、地域の住民や子どもたちに里山や身近な環境に対する意識の向上を図ることを目的とする。

研究所では「サイエンス・カフェ」を開催し、さまざまな環境問題について専門講師に解説いただく。

子どもむけの「キッズ・サイエンス・クラブ」では、屋内外のフィールドを使用し、わかりやすい生の環境体験学習を開催。大学教員や教育関係者などの専門家に直接教わることができるのも大きな特色であり、どちらも内容の濃い環境学習の場を提供することにより、環境保全意識の向上を図る。

2. 事業内容

定款に掲げる特定非営利活動事業の中で②地域における環境にかかわる調査・研究・企画・教育事業を中心とし、平成 26 年 4 月～平成 27 年 3 月の間に活動を行った。

事業は、①里山保全活動 ②はりま里山の自遊人 ③里山ガーデン冒険ひろば ④サイエンス・カフェ ⑤キッズ・サイエンス・クラブ ⑥地域交流事業 ⑦研究活動 ⑧連携教育活動支援 ⑨「海と空の約束プロジェクト」との連携活動 の 9 項目である。

① 里山環境保全活動

「定例里山保全活動日」として、毎月第 2 日曜午前中および不定期にも実施。森林や散策路の手入れと管理、遊具の管理や修繕などを行った。参加人数のべ 78 名。



② はりま里山の自遊人



年 4 回・四季ごと(4・7・9・1 月)の第 2 日曜午前に開催。
講師：日本自然観察指導員・奈良吉也氏、ひょうご森のインストラクター・藪内康彦氏。
里山を散策しながら五感を使って様々な自然体験を行う自然観察学習会。26 年度は 9 月から開始し 2 回実施し参加人数のべ 23 名



③ 里山ガーデン冒険ひろば

7 月より毎月第 4 日曜日 10～15 時開催。
「自分の責任で自由に遊ぶ」をコンセプトに、プレーリーダーのサポートのもと、子どもたちは里山を思い切り満喫。
落ち葉アート、割り箸鉄砲作りなど、子どもが楽しめるものも用意した。
同時に保護者プログラムとして、手作りピザ体験やアロマクラフトなども行った。
9 回実施し、参加人数のべ 387 名





④ サイエンス・カフェ

毎月第2日曜の午後に開催。

- 4月「オープン・サイエンス・カフェ」
- 5月「山のもったいを生かす」
- 6月「里山のめぐみとしてのきのこ」
- 7月「身近な水辺と生き物のおはなし」
- 9月「BDF～バイオ・ディーゼル・フィエル」
- 10月「暮坂断層と地震防災」
- 11月「無重力の世界へご招待」
- 12月「放射能と除染」
- 1月「ジオパークに行こう」を開催。

テーマや講師の雰囲気イメージした手作りスイーツも好評いただいた。参加人数のべ203名

⑤ キッズ・サイエンス・クラブ

- 4月「子どもフリーマーケット」
 - 7月「校長先生の科学工作教室」
 - 8月「森で探そう！虫・植物大発見！」
 - 11月「かえっこバザール」
 - 12月「里山素材でミニ・ツリー作り」を開催。
- 屋外（里山）と屋内（研究所）の2か所を使いわけ、わかりやすく内容の濃い環境学習を目指している。
参加人数のべ158名



⑥ 地域交流活動

「さくら・つつじ祭り」、「オープン・ガーデン」、「秋の里山祭り」を実施した。参加人数のべ500名
また、第3回ジャコウアゲハサミットを後援。



⑦ 研究活動

地球温暖化学習ソフト「うちエコキッズ」の改良研究と英語版作成を行い、エネルギー環境教育研究誌に論文公表(2014年6月)を行った。また環境技術誌に特集論文を掲載(2014年12月)した。

⑧ 大学等との連携活動

兵庫県立大学環境人間学部のフィールドワークおよび特別フィールドワーク、環境生物学実験と連携し、里山フィールドや研究所施設の活用を行った。

また、課題別教養科目「兵庫の里山」での活用、エコ・ヒューマン地域連携センターの学生活動との連携活動支援、県立加古川南高等学校との連携教育（インスパイア・ハイスクール事業）、県立柏原高等学校の講義・フィールドワーク、香呂南小学校、城見ヶ丘保育園(計120名)のフィールド活動支援を行った。



⑦ 「海と空の約束プロジェクト」との連携活動

里山でのイベント内で環境紙芝居『海と空の約束』の読み聞かせや普及支援を行った。

3. 事業の成果

- ①これまで同様、里山の保全活動を行うことにより、森林の環境が保たれ、遊具の修繕により子どもも安全に遊ぶことができた。また、保全活動を定期的に行うことによって、地域の方の参加を得ることに繋がった。新たな散策路を延伸したことで日々の遊びや散歩などで地域の方々や小学校での活用が増えつつある。
- ②身近な里山で四季を通した環境学習により、近場での自然環境の素晴らしさを体感してもらうことで、地域の方の里山を大切にしたい気持ちがより深まったのではないかとと思われる。
- ③自然体験が難しくなっている現代の子どもたちにとって、住宅街の一角にあり交通の便も良い里山ガーデンはとても行きやすく、外遊びも満足できる場所ではと思われる。保護者にとっても自然の中で子どもと過ごす楽しみを見つけてもらえたように思う。
- ④今まで学習の場に触れることが少なかった一般の方に、アットホームな雰囲気でも専門的な環境学習を行うことによる学習効果は高く、環境に対する意識向上に繋がった。
- ⑤里山と研究所という室内外のフィールドを使い分け、生の体験学習を行うことにより、子どもたちの心に残る環境学習を行うことができた。学校等の教員などの講師と親しく交流することは、子どもにとって大変良い経験となると思われ、保護者の評価も高かった。
- ⑥地域交流の開催で、里山の存在価値などのアピールになり、里山環境保護の意識向上につながるとと思われる。
- ⑦研究関係では地球温暖化学習ソフト「うちエコキッズ」の改善と英語版の開発を行い、学会発表と論文執筆を行った。家庭での二酸化炭素排出量が簡単に表示でき、地球温暖化対策や環境学習に有効であった。また、特集論文「里山再生をめざす市民運動の意義」を公開した。
- ⑧大学連携では学生の社会貢献活動や教育に寄与することができた。
- ⑨里山での活動が朝日新聞記事として紹介された（2014年6月30日 オンリーワン大学編 2014 里山作り科学の入り口）

4. 事業活動の問題点と解決策

学習会実施にあたって、会場の案内を工夫する必要がある、のぼり旗や案内表示を増やすなどした。

JR等の公共交通機関を使った参加も可能だが車で来られる方も多く、駐車場確保が問題となり18台の臨時駐車場を確保した。

活動に必要な運営費、管理費の確保が必要となった。

助成金等の申請を増やし、事業費の確保と平行して研究費の確保も検討する。

地元自治会等との連携も継続していく必要がある。